

107 年度第 1 学期 One Asia 財団国際講義

「アジア共同体：儒教思想と宋明理学」

中国文化大学の創立者である張其昀博士は、彼の著書「孔学今義」の中で、「中国五千年の歴史の中で、孔子の学説は過去と未来をつなぐ中心である。孔子の学説を知らずして、中国文化の起源、発展および将来を完全には理解することはできない」と述べました。

本学の生徒に中国文化を十分に理解させるために、第 12 回 One Asia 財団国際講義で、徐興慶学長は、本学中国文学部長で中文研究所長でもある王俊彦教授に特別に「アジア共同体：儒家思想と宋明理学」の講演をお願いしました。王所長は、中国大学大学院研究所の博士であり、前漢後漢、隋唐、元明代の学術思想史にとっても造詣の深い方です。

この講義では、王所長は孔子の「仁」に対する自己意識、孔子の教育・政治・法律・歴史・宗教的思考、孔子の思想の六大貢献、そして孔子の仁・義・礼、そして孔学四大綱領の歴史的原因に焦点を当て、儒教の内容と発展について詳細に説明しました。王所長の講演の要旨は以下のとおりです。

中国文化は儒教、仏教と道教で成り立っており、儒教が主力です。周人は殷商の鬼神を深く信ずる観念を受け継ぎ、祖先の祭祀を重視し、家族血縁関係を強調し、周公が作った礼楽、血縁による「親親の殺(さい)親親之殺」の父子長幼の序、より始め、政治的「尊卑之等尊尊之等」の君臣尊卑の秩序、まで発展させ、これら周代の礼楽制度ができました。

周王朝の移動の後、周王朝の君臣と父子と尊卑の序の礼楽はますます失われ、臣は君を殺し、子は親を殺すという礼楽序の乱れを孔子は目の当たりにするに付け、また礼楽がいたずらに虚文と化しているのを反省して、直ちに「仁」、「義」、「礼」の道德修養と表現で、周文の新しい形式で、中国の文化と道德の方向性を創り出しました。これをもって中国の新しい儒教の教育哲学、政治哲学、法律哲学、歴史哲学、芸術精神、宗教哲学等が展開していきました。そして道德価値の核心として、道德人格の根本を養成するために、家庭における道德人格をもって、国を治め、天下太平の目標としていくために、中国の儒教思想の大きな方向性が確立しました。

孟子は「性善論」を提唱したが、その中で「尽心、知生、知天」は、孔子がいうところの人間性の中にある「仁」「義」「礼」の道德によって、そして内在する善性を向上させます。儒教の道德的理論は完成しており、内心からの道德の自己規律を強調し、現実の状況における道德的アプローチと判断を重視します。

荀子は道德の自然感性に基づいて、道德の他律性を強調し、道德規範の学習による認知を提唱し、戦国の混乱に対応するために新しい人倫規範の再構築を求め、そして「化性起偽」の考えを提案しています。理性によって認知された道德が人間性を変化させ、人倫秩序の要求に合致した人の自然感性、社会道德規範の綱紀をなす「礼儀の統」を創り、他律道德の社会意義という儒学理論を創り出しました。

漢の時代、董仲舒は漢帝国の統一状況に直面し、秦王朝以来の儒教の倫理的価値観を受け継ぎ、陰陽五行の気を吸収し、天人相応思想を結合し、尊君権を推すことによる「陽尊陰卑」を提唱しました。また、君権を制するという「災異説」が武帝に受け入れられ「儒教のみ尊重し、百家が罷免される」、董仲舒は儒教を再解釈し、政治権力の支援を通して漢代における儒教の影響を拡大しました。

魏、晋、唐の時代には、仏教と道教が主流でしたが、統治と社会秩序の国家制度は依然として儒教でした。宋明理学は道教の天道論、仏教の心性論の挑戦に応じて、張載言の「太虚即気」は道教の「気論」を吸収し、儒教の生生不息、無形で実用的な天道の考えを再解釈し、仏教学の心性論の精密な理論を吸収するものでした。心と自然の理論の微妙さ、「天地の性」と「氣質の性」の超越と制限は、宋明理学の最高峰を創り出しました。程頤の説を継承した朱熹の説は、「理気二分」、「心性情三分」を主張、心を通して万理万物を理解すること、すなわち天の理、理性の原則、知識は道德に近く、荀子の他律道德の思考に近いものです。王陽明の「心即理」の主張は孟子に近く、内心から道德の自己規律を強調し、道德的良心の活発な感性を強調し、より硬直化した道德規範を破り、秦以来の儒教道德にある本質と活力を再発見しようとしています。

王夫之の時代を経て、張載の「気論」思想が受け継がれ、「天地の気」の理論を孔子、孟子、董仲

舒、朱、王陽明と融合させ、孟子の「性善論」と荀子の「性悪論」を結合させました。この道徳の自立と他律の調和は、「命日降，性日生」に見られるように、先天性の善と後天性の道徳的実践が一体統合され、宋明理学の代表となりました。

中国文化は広く多様であり、儒教が主流であり、儒教は道徳的価値を中核としていますが、それは常に時代の流れを吸収し、時代とともに進歩しています。そして二千年以上にわたり、儒教は中国文化の中で最も精神的な活力のあるものとなっています。

この講義では、参加した教師・学生が王所長の一気呵成に解説される儒教思想の全貌に深い印象を持ちました。本学の学生にとって、身に着けるべき基礎教育を学ぶのに最高の機会でした。

徐学長は最後に補充説明をし、19世紀中期以降、西洋文明が東アジアに入ってから近代化の過程で、中国、北朝鮮、日本を問わず、皆文化的ショックと寛容という問題に直面した。例を挙げると、清朝末期の「西洋運動」が提唱した基本的な思想は、「中体西用」であり、これは中国の伝統的な思想、文化、制度に基づいた西洋の先進的な科学と技術を導入しようとする考えでした。朝鮮にも「東道西器」と呼ばれる同様の考えがあります。また日本の明治維新には、「和魂漢才」という概念が「和魂洋才」に変わり、国民は西洋文化を学ぶよう奨励されたが、同時に国民が伝統文化を守ることを求められました。これは、東アジア文化圏全体に共通した学問の形成と発展進化であると言えるでしょう。

歴史学科修士課程2年生の武石信一は、儒学の道徳思想はAIが発展しつつある社会で、今後もお有効だろうかという質問をしました。これに対し王所長は、儒教が漢、唐、宋、明、清の王朝の長い歴史を通して検証され、未だに淘汰されずにある。このことから儒教の道徳は永遠性と一貫性を有していて、今後発展する順応性がある。資本主義は今日発展しているが、資本主義自体は道徳を内包していない。AIの知恵の将来の発展は非常に強力な道具であるけれども、その道具が道徳的良心を欠く人々の手に渡るならば、それは原爆よりも恐ろしいかもしれない。これに対し、道徳的良心は人類に幸福をもたらす。したがって、AIが進む国では道徳性がさらに必要とされていることは間違いない、と説明しました。日本語科4年の朱相瑩は、世界中の中国の孔子学院の成果と影響について尋ねました。

この講義の内容は豊富で、議論が白熱し、知識と活気に満ちていました。

(執筆:黄美恵 日本語科助理教授、翻訳:武石信一 日本語科助手)